

## 三十三鎮神頭図

北基行記

北京市 南新華街 虎坊橋近くの路上

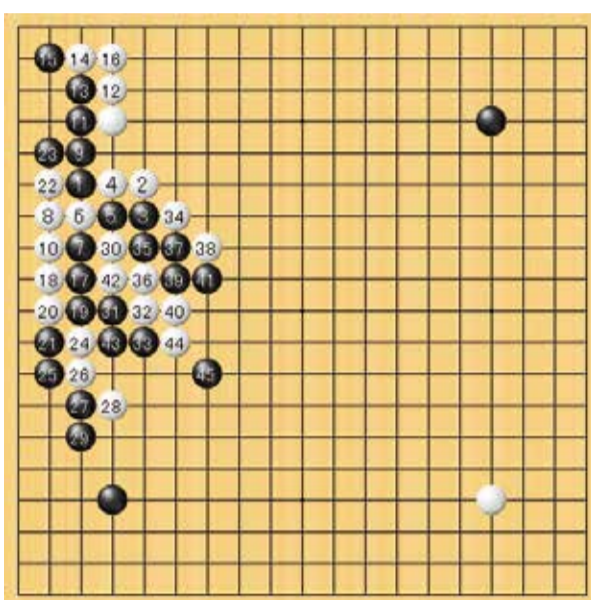
## 『三十三鎮神頭図』を論評する

唐代に『三十三鎮神頭図』という名画があったと聞く。古代中国人と外国人が囲碁をさしている場面を描いた絵である。歴史的故事を忠実に描いており、ここから大切な事を学ぶことができる。則ち、国際的運動競技を如何にして公平に処理するかの問題である。これを機会に認識を新たにして、今後、国際試合で起こりうる不明朗な態度を防止あるいは改める上で一助になればと思うのである。

惜しいことにこの古画は早期に行方不明になった。その模写本の類がどこかに残っていないか気になるところであるが、知識不足により、残念ながらこれにはお答えできない。幸いに唐代に一冊の本があり、この絵が画かれた故事やこれにまつわる話が記載されている。それですし大胆であるがその辺を論評することが可能である。

唐代の有名な小説家、蘇鶯が書いた《杜陽雜編》という書に、この歴史故事の記載があり、この絵画のことに触れている。

故事は唐宣宗の大中年間、則ち紀元九世紀中頃に起きた事件である。当時、日本から王子が来訪し、唐皇帝に多くの禮品を献上した。唐宣宗は設宴して日本王子を歓待し、



鎮神頭（ちんしんとう）  
中国の古棋書にある図で、一手で両シチョウを防ぐ手。  
黒45が鎮神頭。

各種雑劇を共演させ、貴賓として歓迎した。日本の王子は囲碁が得意で、中国の棋手と手合わせがしたいと要求された。宣宗は顧師言という一流の棋手を指名し日本王子と勝負させた。双方は三十三手で勝負がつかなかった。その一瞬、顧師言が「鎮神頭」という妙手を打ち出した。もう勝ち目なしと見た日本王子は、顧師言は何流の棋手かと聞いた。そばで観戦していた唐の官吏は、三流だと教えた。王子が一流と手合わせしたいと要求すると、その官吏は、三流に勝てば二流と、二流の次に一流だと、答えた。日本の王子は長嘆息して、「しよせん小国は大国

には敵わん」と述べ、負けを認めた。

作者蘇鶯は唐代の光啓年間の進士で、この事件発生時期と十年余と離れていない。彼のその他の唐代記述は史的価値が高ことから、『杜陽雜編』のこの記述は、信用できる。かれは、この故事になんら批評を加えていないが、『三十三鎮神頭図』を書いた画家を“好事者”と讃えているところより、唐朝の官吏の態度に不満があったことが分かる。

今もしも我々の眼でこの事件を評論すれば、唐朝人の本試合に対する、特に国際試合に臨む態度は、大きな間違いである。現在の尺度で、古代を測るわけにいかないが、この歴史的故事より多くの経験を得ることが出来る。

唐宣宗がふるまった日本王子への款待（歓待）は、中国の賓客を厚遇する伝統的な客好き風習の一面を表し、顧師言の一手「鎮神頭」も立派であった。しかし、大国が小国をいじめる、囲碁を見学する官吏の態度は全くだけない。このことがあってから、“好事者”が画いた『三十三鎮神頭図』は、顧師言の勝利を誇張するものであって、これもしてはならないと思う。このような悪い気風は、封建時代とともに、永遠に人々により唾棄されるべきだ。



北京市 北三環東路 付近

## 【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 評《三十三鎮神頭図》ひとそえ

国際交流についての話題が続きます。

今回は日中囲碁対決、遣唐使の小勝雄と唐朝一流棋士の顧師言、日本と中国の代表選手による囲碁の一番で、劣勢だった顧師言が今に伝わる歴史的妙手で大逆転したという囲碁の世界ではよく知られた話のようです。

日本と中国の国際試合という鍵を頼りに推測してみると、この第18話が書かれた時代の国際競技会と言えば、中華人民共和国として初めて主催した第26回世界卓球選手権（1961）と特定して間違いはないでしょう。荘則棟選手が日本を破って英雄視され、今に続く卓球中国の礎を築いた大会として知られています。

この仮定が正しいとすると、鄧拓氏が国際交流にあるまじき態度として苦言を呈しているのは、会場の観衆が日本選手には拍手を送らないどころか、ミスを喜ぶような態度で終始し、中国選手への圧倒的な応援が会場を包み、審判の判定にも影響を及ぼしたことを捉えているのでしょうか。前大会チャンピオンだった松崎キミ代選手もその渦中にあっただけですが、劣勢でも常に笑顔を絶やさない姿勢が周恩来総理から格別の好感を得たという美談を残しています。

日中戦争終結から16年後、日中国交正常化の11年前の国際試合、とりわけ日本との試合での雰囲気や周恩来首相主導のピンポン外交のはしりとも言えそうな時代背景を想像させる文章であります。

井上邦久



周恩来総理と日本選手団

## 評《三十三鎮神頭図》原文

据说有一幅唐代的古画，名叫《三十三鎮神頭图》。这是描绘古代中国人同外国人比赛围棋的一幅图画。它反映了一个真实的历史故事。我们可以从这个故事中得到一些教育，对于如何正确地处理国际的运动比赛之类的问题，将会进一步有所认识，便于彻底地防止和纠正人们在看待国际比赛中的某些不正确态度。

这一幅古画可惜早已失传了。它是否有摹本或其他遗迹留在人间呢？恕我见闻谩陋，不能确切地回答这个问题。但是，幸亏有一部唐代的著作，记载了这幅图画所描绘的故事内容。这就使我们现在仍然可以对它进行大胆评论。

唐代著名的小说家苏鶯，写了一部书，名为《杜阳杂编》，其中记载了这个历史故事，也提到了这一幅图画。

故事发生在唐宣大中年间，即公元九世纪中叶。当时日本的王子访问中国，献给唐皇帝许多礼品。唐宣宗设宴款待日本王子，并且演出百戏杂技，欢迎贵宾。日本王子擅长围棋，要求与中国的棋手比赛。宣宗指定了第一流的棋手名叫顾师言的，跟日本王子比赛。双方各下了三十三着棋，不分胜负。顾师言使出了一个绝招，即所谓“镇神头”的一着棋。日本王子估量自己赢不了，就要打听顾师言是第几流的棋手。在旁边看棋的唐朝官员骗他说是第三流的。王子要求见第一流的。那个官员又说：必须赢了第三流的才能见第二流的，赢了第二流的才能见第一流的。日本王子长叹一声说“小国当然不如大国”，于是只好认输了。

看来《杜阳杂编》的这一段记述是可靠的，因为作者苏鶯是唐代光启年间的进士，距离故事发生的时候只有十几年，他记述的唐代其他史实也都很有价值。虽然他对这个故事不敢加以批评，但是他对唐朝官员的态度显然很不赞成，并且他把描绘《三十三鎮神頭图》的画家称为“好事者”，在字里行间流露出他的不满。

如果用我們現在的眼光评论这件事，那末，可以肯定地说，唐朝人对待这种比赛，特别是涉及国际关系的这种比赛的态度，是非常错误的。我们不必要也不应该用现代的帽子，乱扣在古代人的头上；但是，我们却很需要从这个故事中吸取历史的经验教训。

事实很清楚地表明，唐宣宗对日本王子的款待，在相当程度上表现了中国人自古以来好客的传统；顾师言下了“镇神头”的一着棋，也并不措；但是，看棋的那个官员却表现了大国欺负小国的恶劣态度；而“好事者”事后又画了《三十三鎮神頭图》，故意夸大炫耀顾师言的胜利，那就很不应该了。这样的坏风气，让它随同死去了的封建时代，永远被人们所唾弃吧！